

◇職業差別と向き合う東堂太郎の葛藤 (5月29日第5回例会報告) ……………	1
◇東堂太郎の原則的かつ柔軟な思考について——報告を終えて (杉山雄大) ……………	2
◇『神聖喜劇』には考える素材がたくさん詰まっている (田口純) ……………	4
◇講座第二期プログラム……………	6

## 職業差別と向き合う東堂太郎の葛藤

### ——「隠された根柢」をめぐる杉山雄大さんの分析

HOWS 連続講座「大西巨人『神聖喜劇』を読む」第2期第1回(通算第5回)は、2019年5月29日に開催されました。参加者は17名。杉山雄大さんが、「第五部 雑草の章——「道義および公正」の模索」と題する報告を行いました。杉山さんは、二松学舎大学大学院に在籍、現在の研究課題は、大西巨人です。人間の自由や権利をめぐる根源的な問いかけに注目する杉山さんは、巨人の出発期からの歩みを丹念に検証しているところです。

今回の報告で杉山さんが取り上げたのは、無意識的な差別の問題でした。部落差別、学歴差別、職業差別など、『神聖喜劇』は、複数の差別の問題を取り上げています。むしろ東堂太郎は、差別が不条理なものであることを承知し、積極的に是正に努めます。しかし、複合的に現象する差別は、人々の意識にも深く入り込み、容易に打破できるものではありません。食卓末席組の仲間との会話の中で、東堂は、差別に関する自らの言動を執拗にたどっていきます。杉山さんの報告は、東堂の特異な思考に迫ろうとするものでした。

職業に伴う社会的地位による評価の高低を、東堂は、「解消せられるべきなのであろうか」と問います。職業差別をめぐる歯切れの悪さは、武士道の教えを日常的に父から聞かされていたことに由来します。武士道に克己的精神を見出す東堂は、同様の要素をニーチェの主張からも読み取ります。

第三部第二「十一月の夜の篝火」においてニーチェは、英雄思想の参照項として登場していました。村田とのやり取りから、自己を卓越した存在とみなす意識とすべての人々を等しく扱う志向とが東堂の内部においてぶつかり、葛藤を引き起こします。内省を分析した杉山さんは、東堂が簡単に結論を出せないのは、俗物性一般と職業や階層の固有性との切り分けが困難であること、また、判別を妨げる要因として武士道の否定的側面があることを指摘しました。

杉山さんは、さらに東堂の思考の「隠された根柢」(II-193。『道徳の系譜』からの引用)を明らかにするため、ニーチェの主張の確認も行いました。善悪の価値判断には、貴族階級と平民階級との隔たりの反映があること、貴族階級の感覚に根ざした「よい」は、キリスト教に基づく「よい」の反対物となりうるものが、『道徳の系譜』では語られています。現状を追認するのではなく、よりよい方向に高めていこうとする意識が東堂にはあるがゆえに、ニーチェへの共感があること、職業差別の問題についても単純ならざる思考が生起することを、杉山さんは説明しました。武士道とニーチェ思想との相同性や英雄思想と差別問題との関連性は、これまできちんと論じられてきたことがなく、杉山さんの発表は、東堂太郎ひいては大西巨人の倫理観をとらえる上で重要な材料を提供したものと言えるでしょう。

意見交換は、差別の問題を取り上げながら、部落差別について報告で言及がなかったのはなぜか、という質問から始まりました。職業差別と重なりつつ、部落差別は、また別の歴史的背景を持つ事象として

あり、『神聖喜劇』でも偏見の打破への全力的な取り組みが展開されています。杉山さんは、力不足ゆえに触れることができなかつたと答えていましたが、今ここにある現実と格闘しながら、自分たちが内面化している価値観を乗り越えようとする東堂の意志は、当然部落差別と向き合うことにもまっすぐつながるでしょう。議論は、そこから、東堂の二律背反的な考えをめぐって拡がっていき、小説の主人公ゆえに思索が再現的に示されていることを評価できる、あるいは、西洋思想だけではなく武士道という伝統的なものが理想の模索の手がかりにされているところが面白い、などの意見が出されました。終了後の懇親会でも活発なやりとりは続き、映画化や漫画化の話題から、『神聖喜劇』をどのように世に広めるかという相談にもなりました。本講座が普及活動の一つの踏み台になればと思います。

なお、報告の杉山雄大さんから報告を終えた現在における感想を、また、参加者の田口純さんから読後感を記した文章を寄せていただきました。『神聖喜劇』が取り組んだ法や倫理の極限を考える上で、いずれも有益なものと思われまます。ぜひご一読ください。

## 東堂太郎の原則的かつ柔軟な思考について

### ——「大西巨人『神聖喜劇』読む」第五部「雑草の章」の報告を終えて

杉山雄大 (HOWS 受講生)

なにが善であり、なにが悪であるのか、という価値判断の問題が常に私の関心にある。当然、部落差別を含むあらゆる“差別、は不当であるに違いない。それは自明の事柄のように見える。しかし一方で、それが悪であるということを自覚のない者に説明してみても、説得するのが予想外に難しいことがある。大西巨人は花崎阜平との対談「倫理の根拠をめぐって」(『大西巨人文選3 錯節』みすず書房、1996年12月)で、「例えば、人を殺してはいけないというような法律の根拠は、万古不易のものである。ただ、世の中が、人を殺して何が悪いか、他人のものを盗んでどうして悪いか、というような風潮になってくると、学校の教師が、生徒から、“性的退廃があって、どうして悪いか、”としつこく聞かれたら、返答に窮すると思うんです。殺人、窃盗、その他諸々が横行する中で追及していくと、それこそ神でも設定せんことには、「人は何を行なってもよく何を行なわなくてもよい。」というような所に行き着くと思う。しかしそれを、神なしに、人を殺すことは誤りである、盗むことは不正である、あるいは……と言っていく、それが〈制約〉だろう。それを、ただ単に言うだけじゃのうて、見つけ出していかないといかん」と述べた。「人を殺すことが誤り」であることは、自明のことでなければならない。だが、巨人が述べるように、それがなぜ「誤り」であるのかということをしつこく問われた場合、「返答に窮する」ことがある。例えば「人の命は何よりも大切である」「他人の命を奪う権利は誰にもない」「自分がされて嫌なことを他人にしてはいけない」などと返答をすることはできる。しかし、「なぜ「人の命は何よりも大切」なのか」などとその根拠を繰り返し問われたら、誰もがどこかで「返答に窮する」だろう。あるいは、そのような自明のことを問う問答自体が、実際には行われることのない観念的な極論に過ぎないと考えることもできよう。しかし一方で、戦争とは、巨人が述べる「殺人、窃盗、その他諸々が横行する」状況ではないのか。自明のことであるべき人の命の価値を、共有することのできない状況が、実在するのだといえる。

また、これは人の命の価値の問題に限られるものではなく、あらゆる価値判断の根底に存在する問題である。価値判断の根拠は、突き詰めて考えるほど、不確かなものにみえる。巨人が述べたように、「神」、あるいはそれに類する善悪の絶対的な価値判断基準を持ち込まない限り、それらの問いや疑いにたいする“たしかな返答、を行うことはできない。しかし、そもそもそのような絶対的な価値判断基準はどこにも存在しないだろう。

私がここで述べたいのは、「たしかな返答、が不可能であるということではなく、「たしかな返答、などというものがあれないことを理解した上で、なお「人の命は何よりも大切である」と言い続けるとしたら、それはどのようにして行われるのか、ということである。端的に言えば、普遍的な正しさを想定できないにもかかわらず、あるものを正しいものとして、また他のあるものを間違っているものとして判断しなければならない状況に常に置かれている私たちは、そのなかでどのような態度や視角を持てばよいのか、という問題である。私が報告した内容は、以上のような問題にもかかわるのだろう。

巨人が述べた「人は何を行なってもよく何を行なわなくてもよい」という状態は、東堂の我流虚無主義「世界は真剣に生きるに値しない（本来一切は無意味であり空虚であり壊滅するべきであり、人は何を為してもよく何を為さなくてもよい）」（第一部「絶海の章」第一「大前田文七」32～33頁）を想起させる。繰り返される自己反省的な思考のなかで、東堂はしばしば虚無主義的な観念に襲われる。にもかかわらず、東堂は倫理的かつ克己的な振る舞いを欠かさない。その根底が何であるかを探るなかで、東堂は自身の教養の形成過程を検討し、ニーチェや「日本古来の武士道」の問題に行き当たる。虚無主義者であるにもかかわらず、倫理的に振る舞っていることの根底には、ニーチェや「日本古来の武士道」に由来する美的な克己的精神がある。しかし、そのニーチェや「日本古来の武士道」には否定的な側面があり、それが床屋にたいして東堂が必ずしも積極的な評価を行えないことの原因となっている。しかもそれは、床屋という職業にたいする意識というよりは、「俗物性・卑俗性一般」にたいして、「卓異性」や「創造性」を希求する意識と関連するものであり、彼の理想主義的な精神とも縁があるようである。問題は複雑に入り組んでいる。

東堂は自身の価値判断や行動の根拠を繰り返し検討していく人物である。その営為から普遍的な価値判断基準などが導き出されることはないが、むしろそのような反省を繰り返すことによってこそ、東堂は原則的かつ柔軟な姿勢を保つことができているのだといえる。このような東堂の思考態度が、室町や村田の部落差別にたいする意識・無意識に影響を与えていくこともありうるだろう。

参加者から、報告の内容が部落差別の問題や「遊女」の問題に触れていない点や、ニーチェを職業差別の問題と絡める意義などについて問われた。上記の考察は不十分であり、それらの問いに答えるものとはなっていないが、報告の内容や意図を補足するものとして、役立てていただけたら幸いである。

## 『神聖喜劇』には考える素材がたくさん詰まっている

田口純（講座参加者）

仕事の関係で表の顔とは別の・人生の闇に触れることが多いので、正論の言い切りや攻撃的な言い募りには抵抗を感じます。「引きこもりは犯罪予備軍だ」とか「戦争の加害に触れることは反日だ」とかの発言が堂々とまかり通る現在、東堂のあでもないこうでもないと言うものの言い方（「何を為してもよく何を為さなくてもよい」二巻 p126）やAでもあるけどBでもあるというものの考え方に共感を感じます。精神科医の神田橋條治の「こういう気持ちはあるけれどああいう気持ちはあると言う時、その言葉はほとんど信用しても良い。なぜなら本来人の気持ちというのは沢山あり、それを葛藤の形に表されたという時、これは統合と言えらるから」（2019年2月事例検討会）という教えに賛同するからです。

いくつかの対立した発想の一つに、法を遵守することの気概と遵法背信への恐怖・憎悪・絶望の対立があると考えます。東堂は徹底して軍隊の法を遵守する方針を貫き、対立者たる大前田もその方針を貫きます。大前田は理屈で抗弁する東堂を一度ぶったたくだけで（二巻 p325）ぶん殴りたい衝動を抑え「腹の中で笑うとる奴がいる。そこまでせん」（三巻 p124）、最後には東堂の軍隊内務書の規定違反の破れ目

を つい て 64 回 の 平 手 打 ち を 完 遂 し ま す ( 五 卷 p445)。正 反 対 の 位 置 に 置 か れ た 二 人 で す が、大 前 田 の 遵 法 の 精 神 は ほ ぼ 盤 石 に 描 か れ て い る 故 に、彼 の 記 述 も、性 格 は「偏 執 狂 的・加 虐 変 態 的 (一 卷 p455)」に も か か わ ら ず、「不 敬 罪 的 な 平 民 感 情 を 吐 露 し、銃 後 の 辛 さ を 気 づ か い、幅 も 厚 み も あ る 人 間 的 理 解 を 示 す」(一 卷 p451)「い さ ぎ よ く 公 正・淡 白 な 思 い 切 り の よ さ」(三 卷 p332)「一 種 の 公 明 正 大 な 精 神 (四 卷 p422)」「偉 大 な 魂 (四 卷 p430)」と さ れ て い ま す。

遵 法 の 気 概 の 反 対 は、恣 意 的 な 法 解 釈 も し く は 護 る べ き 法 の 不 完 全 さ、へ の 無 力 感 で し ょ う。軍 の 法 規 に 関 し て「軍 へ 天 皇 親 率 ノ 下 ニ」に あ る と い う「不 動 の 最 上 法 源 が 実 存 す る 以 上、こ の 領 域 に 行 わ れ て い る の は、ブ ル ジ ョ ワ 法 治 主 義 で す ら な く、そ れ 以 前 ま た は 以 下 の 特 種 の 法 治 主 義 で あ り、こ の 領 域 を 支 配 し て い る の は、ブ ル ジ ョ ワ 制 定 法 で す ら な く、そ れ 以 前 ま た は 以 下 の 特 種 の 制 定 法」(二 卷 p334、三 卷 p258、四 卷 p384) と 東 堂 は 認 識 し て い ま す。

横 道 に そ れ ま す が「ブ ル ジ ョ ワ 法 治 主 義 以 前・以 下」と い う 表 現 に、麻 薬 を 中 国 民 衆 に 強 引 に 売 り つ け て そ の 資 金 で 中 国 侵 略・満 州 経 営 を 行 っ た、「倫 理 観 を 退 歩 さ せ た」「日 本 の 資 本 主 義」に つ い て 語 っ た 竹 内 好 の 次 の 言 葉 を 思 い 出 し ま し た。「今 度 の 戦 争 が 帝 国 主 義 の 侵 略 戦 争 で あ っ た と い う の も、ほ ん と う は 思 い あ が っ た 判 断 な の で、じ つ は 近 代 以 前 の 略 奪 戦 争 で あ っ た の で は な い か。少 なく と も、帝 国 主 義 的 に 偽 装 さ れ た 原 始 的 略 奪 と い う、二 重 性 格 的 な、特 殊 な 日 本 型 で は な い か」(「中 国 人 の 抗 戦 意 識 と 日 本 人 の 道 徳 意 識」)。「略 奪 戦 争」と い う 言 葉 か ら さ ら に 連 想 し た の は、官 給 品 を 紛 失 し た 際 に 上 級 者 よ り 教 示 さ れ た「内 実 に お け る 窃 盗 の 奨 励」と い う 漫 才 の よ う な く だ り で し た (四 卷 p360)。

遵 守 の 気 概 と、法 体 系 そ の も の へ の 絶 望 を 同 時 に 持 ち つ つ あ っ た 東 堂 は、最 終 卷 で は 同 年 兵 と の 連 帯 感 の 創 造 の 中 に、遵 法・絶 望 を 超 え た、ま た 東 堂 の 虚 無 主 義 を 一 掃 す る、大 い な る 希 望 を 見 出 し た と 思 い ま す。つ ま り、差 別 事 件 の 解 決 の 途 上 で の「三 人 寄 れ ば 文 殊 の 智 慧、人 は 心 心 だ か ら ね」の や り 取 り が あ り (五 卷 p135)、酒 保 で の 新 聞 購 読 希 望 へ の 十 数 名 の 賛 同 が あ り (私 の 心 持 ち の 表 現 は 里 仁、「徳 孤 ナ ラ ズ、必 ズ 隣 ア リ」同 p239)、そ し て 模 擬 死 刑 の へ の 堂 々 と し た 抗 議 (身 心 放 下 と い う 観 念、同 p305) と 村 崎 古 兵 の 応 援 と、打 擲 身 代 わ り へ の 三 十 余 名 の 同 調 者 の 出 現 が あ り ま し た。

変 革 と は な に か あ る 日 突 然 起 こ る 自 然 災 害 の よ う な も の で は な く、過 去 と の 連 続 性 が 必 要 で す。と は い え、そ の 連 なる 過 去 の 遺 産 は 何 か と 言 っ た ら あ ま り 自 身 で は 考 え て い ま せ ん で し た。私 が 青 年 期 に ぼ ん や り イ メ ー ジ し て い た も の は 敗 戦 直 後 に 起 こ っ た 民 主 化 運 動 くら い で、親 類 等 の 近 く に あ っ た 学 生 運 動 系 は そ も そ も 継 続 す る 過 去 の 伝 統 なる も の は あ ま り 認 め な い 印 象 で し た。こ れ ら と は 明 確 に 異 な り、東 堂 は 変 革 の 一 つ の 源 泉 を、自 ら に 身 体 化 し て い る 過 去 の 文 化 遺 産 に 求 め て い る よ う に 思 え ま す。

変 革 志 向 者・東 堂 に は、部 落 へ の 差 別 的 な 言 動 を 改 め さ せ 部 落 民 と 深 い 交 流 の あ っ た・古 武 士 的 気 骨 を 持 っ た 父・東 堂 松 濤 か ら「武 士 た る 者」「武 士 の 子」と た び た び 説 き 聞 か せ ら れ、幼 時 か ら 四 書、春 秋 の 素 読 を 授 け ら れ た (一 卷 p441) 歴 史 が あ り ま し た。こ の 戦 争 で「日 本 古 来 の 武 士 道」総 体 の 否 定 的 側 面 が 露 わ な っ た と し て も「日 本 古 来 の 武 士 道 は 成 人 後 の 私 の 内 部 に も 脆 弱 で な い 命 脈 を 保 っ て い る よ う で あ る」(二 卷 p48) と 彼 自 身 語 っ て い ま す。そ の 証 拠 に、思 考 を た ど る 際 の 引 用 に 膨 大 な 中 国 の 古 典、仏 教 書、江 戸 時 代 の 古 典 が ひ か れ て お り、同 年 兵 と の 連 帯 を 示 す 概 念 も 上 述 の 通 り 古 語 か ら 得 ら れ た も の で あ り ま し た (里 仁、身 心 放 下、百 尺 竿 頭、五 卷 p308)。伝 統 と 変 革 の 関 連 に つ い て は 再 度 竹 内 好 を 引 き た く 思 い ま す。「敗 戦 に よ る ア ポ リ ア の 解 消 に よ っ て、思 想 の 荒 廢 状 態 が そ の ま ま 凍 結 さ れ て い る の で あ る。思 想 の 創 造 作 用 の お こ り よ う は ず が な い。」「戦 争 に 投 入 さ れ た 全 エ ネ ル ギ ー が 浪 費 で あ っ て、継 承 不 可 能 で あ る な ら ば、伝 統 に よ る 思 想 形 成 も 不 可 能 に な る。今 日 の 日 本 は <神 話> が 支 配 し て い る こ と に 問 題 が あ る の で は な く、<神 話> を 克 服 で き な っ た エ セ 知 性 が <自 力> で な く 復 権 し て い る こ と に 問 題 が あ る の で あ る」(『近 代 の 超 克』 p340)。変 化 が 常 態 と な っ て、ね つ 造 と ご ま か し の 積 み 重 な り が 自 然 に 見 え る 現 在、ど っ し り 今 を 見 通 す 座 標 軸 を、私 の 身 体 と 連 なる 日 本 の 過 去 の 遺 産 (正 であ

れ負であれ) から得たいと私は切実に思っています。

その他考えたい課題はたくさんあります。1) 性愛小説の側面=切実な死の予感とエロスの必然かつ密接な関係; 安芸の彼女の流産、父の急死、夫の非業の死、入隊を前にした運命の死の覚悟、身投げの海、青酸カリの所持、仮り葬礼・身代わり水葬としての剃毛、締め落とす誘惑と「両爪先をゆっくり約一メートルに広げると、おもむろに彼女の向股が紅舌を吐き丹花を開いた」という描写との関係(二巻、十一月の夜の媾曳)。2) 時間と空間の自在な展開; 日記のように機械的な時間の連なりもあり、事件の解決に向かった矢印状の定型進化の時間もあり、記憶が繰り返し反復される円環の時間もある、でも主流は現在ここから同心円状に上下左右に自在に広がるカイロス時間の記述であることとその文学的效果。3) 多様な対話の形の提示; 何某事件での性抑圧をめぐる大前田と村崎の掛け合い、金玉の置き場所をめぐる議論、戦争目的についての村上と大前田の対決(正論の弁舌と現実の寡黙)、語りの挿話の中の扇子の万葉がなの人磨の歌を介した K と N 女の求愛(三巻 p513)、十一月の夜の媾曳のシナリオ形式、などなど。

めざましい記憶力の持ち主・東堂はおそらく精神科医・中井久夫の言う「直感像素質者 Eidetiker」でしょう(『徴候・記憶・外傷』、ボルヘス『記憶の人・フネス』も参照)。記憶想起が自在にできる人は細部にこだわり、大きな見通しの中での部分の微妙な配剤・多様性の許容は無理ではないかと、記憶力の乏しい自分はやっかみますが、『神聖喜劇』の展開、東堂の縦横無尽の思考は、多様な揺らぎと矛盾を内包しかつ統合された大きな宇宙観を持っているように感じます。いくつかの単語をきっかけとして、実質数秒の記憶想起の中で膨大な情報が連綿として展開されているのは驚異です。

つい話しの展開に引き込まれて最終巻まで読み切り、あとの巻まで言及して一種のネタばれをしてしまいました。お許してください。土曜は勤務のため参加できませんが、いつの日か水曜日開催が復活されることを願っております。

## HOWS 連続講座「大西巨人『神聖喜劇』を読む」第二期プログラム

### 第1回 5月29日(水) 18時45分~21時15分

「第五部 雑草の章」——「道義および公正」の模索  
報告=杉山雄大(HOWS 受講生)

### 第2回 6月29日(土) 13時00分~16時30分

「第六部 迷宮の章」——「芸術家」であろうとする心構え  
報告=渥美博(HOWS 受講生)

### 第3回 9月21日(土) 13時00分~16時30分

「第七部 連環の章」(第一~第四)  
報告=山本恵美子(HOWS 受講生)